3人の生き方から考える

# 地域に生きることの価値、地域に生きる人に必要な力

グローバル化する日本社会において、主体的に「地域に生きる」ためには何が必要なのだろうか。ローカルな生き方を「閉じられたもの」ではなく、「大きく開かれたもの」として捉え、それぞれの地から新しい価値観を発信する3人の生き様から考える。

鹿児島に生きる

## 海外に出たことで見えてきた鹿児島と日本の魅力、自分の生き方

イギリス ケンブリッジ大 在学

岡本尚也（なおや）

### 知覧（ちらん）で、ケンブリッジで、生き方を考えた

高校卒業までずっと鹿児島で暮らしました。鹿児島での価値観が全てではないはずだと感じていたこともあり、東京の大学に進学したのですが、確かに鹿児島とは違う価値観が存在することを実感しました。そして、「海外に出れば、もっと多様な価値観に出会えるはず」と海外留学への思いが高まっていきました。

大学卒業後、ケンブリッジ大で3カ月間の共同研究に参加する機会を得ました。その後、日本に戻って修士課程を修了し、2011年より再びケンブリッジ大で研究を行うことになり、今に至ります。世界中から研究者が集まるケンブリッジでの生活はとても刺激的です。研究室はもちろん、立ち寄ったパブでも、各国から来たさまざまな分野の研究者と議論が始まります。そうした時に強く実感するのは、自分の考えを理由と共に明確に伝えることの大切さです。日本以外の国々では、学校でも職場でも、自分の考えを明示できない人は、極端に言えば、存在しないものと見なされてしまうからです。そして現実には、多くの日本人が自分の考えを論理的に伝えることが出来ず、苦労を強いられています。

ただ私は、自分の意見を明らかにすることに、抵抗感は持っていません。私は日本にいる頃から、「それが普通」「みんなそうする」などと言われることに対して、「本当にそうなのか」と自分が納得するまで考えていました。「みんなそうする」という理由だけで受け入れるのは、自分の生き方を他者に委ねてしまうことになると思ったからです。

私の考え方に大きな影響を与えたのは、地元・鹿児島の知覧（ちらん）特攻平和会館です。学校行事やプライベートで何度も訪問しましたが、特攻隊員の方々の歴史に翻弄（ほんろう）された人生、尊い命の輝きに触れ、家族や友人、恋人との絆の大切さを再認識すると共に、「自分の人生」についても考えるようになりました。さまざまな選択肢が目の前にあり、「自分の人生」を考えられる時代と境遇に心から感謝すると共に、「自分という人間はこの世にたった1人なのだから、人

生を自分で切り拓くのは当然だ」「自分に無欲に、大きな志を持ち、社会と歴史に対して精いっぱいの貢献をしよう。そして、その実現のために、自分の個性、能力を磨き続けよう」と考えるようになりました。

## 海外に出て見えてきた地域の魅力と自分の使命

自分に出来る社会貢献は何か。その道筋が見えてきたのは、海外で学ぶようになってからです。

ケンブリッジ大には、120以上の国から学生が集まっており、互いの国についてよく話をします。そこで私は、日本の「普通」は世界の普通ではないことを知りました。また一方で、経済的に豊かで、便利で、安全で、公教育が行き届いた日本は、国際社会では希有な国であると、世界の中の「日本」を発見しました。そして同時に、故郷である鹿児島の良さにも改めて気が付きました。人と人とのつながりや受け継がれてきた伝統・風習、美しい自然など、世界にも誇れる魅力が鹿児島にはたくさんあります。海外に出たことで、日本、そして鹿児島の価値を再発見したのです。

おかもと・なおや

◎1984年生まれ。鹿児島県・私立　鹿児島修学館高校卒業。慶應義塾大理工学部卒業。同大大学院理工学研究科修士課程修了。公益財団法人・船井情報科学振興財団奨学生として、イギリス・ケンブリッジ大 物理学部キャヴェンディッシュ研究所において博士課程在籍中。Connect the Dots 運営委員。

若者がいったん海外に出ると、日本に戻りたくなくなってしまうのではないかと考える人もいるようです。でも、私の知る日本人はそうではありません。彼らは、外に出ることでさまざまな問題を抱える故郷や日本について自分なりに考え、自分の役割を知り、社会に貢献したいという気持ちを抱くようになっていました。私も、鹿児島と日本の素晴らしさを守り、もっと良くすることが、自分の使命だと信じるようになりました。そして、その手段を模索していた時、SSHの取り組みでケンブリッジを訪れた日本の高校生との交流を経験しました。彼らと接し、自分に出来る貢献は若い人たちに刺激を与えることではないかと思うようになったのです。

日本の高校生は世界でもトップクラスの基礎学力を持っており、グローバルに活躍する素質を備えている若者はたくさんいると思います。しかし、多くの高校生には、「今の自分」と「世界で活躍する未来の自分」を結ぶ道筋が見えていませんし、世界というものを知ることなく、それぞれの地域で生活しています。そうしたどこにでもいる普通の、しかし大きな潜在能力を持った

**Connect the Dotsの活動**

### 世界で活躍する若手日本人との出会いを通してグローバルに挑戦するきっかけを高校生に与える

11年よりイギリス・ケンブリッジ大において、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）より派遣された高校生と日本人留学生との間で、グローバルに活躍する研究者になるためのキャリアパスなどに関するセッションが行われた。高校生が大いに刺激を受ける様子を見た岡本さんらは、高校生と世界の距離感を縮めるために、世界で活躍する若手日本人が日本の高校を訪問してセミナー・ディスカッションを行う非営利団体、「Connect the Dots」を設立。全国のSSHや進学校を中心に活動を行っている。

Connect the Dots Webサイト　http://www.ctd-japan.org/

高校生に、海外に出るという選択肢が決して特別なものではないことを伝えたいと思いました。彼らに、世界という大きなキャンバスに自分の夢を描き、その実現に向かって邁進してほしい。将来、世界に貢献しながら、国際社会の中で輝く日本、そして地域の担い手となってもらいたい。そんな期待から、政治・ビジネス・学術など、さまざまな分野において世界中で活躍する若手日本人たちと共に、非営利団体「Connect the Dots」を立ち上げることにしたのです。

## 対話の中で生徒は生き方を考える

私は、自分を知ることと、地域、日本を知ることはよく似ていると思います。どちらも閉じられた状態では価値が見えにくく、視野を広く持ち、他と比べることで本質が分かってくるからです。社会に「自分」という人間が1人しかいないように、鹿児島という地域も日本という国も唯一の輝きを持っています。地域がそれぞれの輝きを生かして活性化していくことは日本全体の活性化につながると、私は確信しています。

もちろん、地域が抱える課題は難しいものばかりです。鹿児島でも、シャッター街の増加や大手メーカーの工場撤退などが進んでいます。しかしそれでも、多様な世界の存在を知り、故郷の良さを再発見した若者たちが、本気で地域の活性化に取り組めば、地域に新たな可能性が開けるのではないかと思うのです。

とはいえ高校生にとっては、海外研修などに参加し、地域の外に出ることは簡単なことではありません。だからこそ学校の先生方には、授業の中で多様な世界があることを伝えていただきたいと思います。私たちのような団体を活用することも1つの方法でしょう。広く世界で活躍する人たちとの対話は、高校生にとって自分の生き方や地域のあり方を考えるきっかけになるはずです。

対話は学びの原点です。ケンブリッジやオックスフォードなど、世界の大学が対話を重視するのは、語り合うことで自分の考えが明確になったり、新たな考えが生まれたりするからです。高校生にとって最も身近な対話の相手は、友人であり、先生です。先生が勉強の意味について語り、そして地域や国、更に世界の一員としての自分の思いを語ることで、生徒も地域や国への思いを語り始めるのではないでしょうか。

国際問題であっても地域の問題であっても、正解が用意されている問題は残念ながらありません。答えは誰にも分からないからこそ、先生方には、「私はこう思うけど、君はどう思う?」と教室で生徒と語り合っていただきたいと私は思います。そうした時間の中で、日本の若者は自分を信じ、自らの道を切り拓いていく力を身に付けるはずです。

新潟県 村上市に生きる

# 地域での日常の中に見過ごされていた価値を見いだし、育てていく

味匠「岩(き)っ川(かわ)」専務取締役 吉川真嗣(きっかわしんじ)

## 地元が嫌いな私が、地元のために動く

新潟県下で最も古い城下町・村上で、道路の拡幅を伴う大規模な区画整理事業が行われ、私の住む旧町人町もその対象であることを知ったのは1997年のことです。兄の代わりに、家業の鮭の製造販売業を継ぐため、やむをえず商社を辞めて、東京から戻り、7年が経った頃です。

当時の私は家業のことで頭がいっぱいで、地域の問題に対してあまり関心を持っていませんでした。町の寄り合いに出ても、黙って話を聞くだけ。商店街の付き合いも、極力避けていました。私はもともと、地域の閉鎖的な気風が嫌いで、中学生の頃から「この地域から出たい」「将来は国際的な仕事がしたい」と思っていました。父親のため、家業を守

るため……そう納得して村上に戻って来ましたが、地域に対して積極的にはなれませんでした。

ある時私は、伝統的な建築物や町並みを保存する全国的な組織の方と出会いました。何げなく村上の状況を話したところ、その方は「城下町を壊して道路を拡張しても、ただ車が通り過ぎるだけで商店街は逆に衰退する」と血相を変えて反対しました。そればかりか、「取り返しがつかなくなる前に、あなたが食い止めなさい」と言うのです。

近代化で町が活性化すると思っていた私は驚きました。しかし、もしこの話が本当なら大変なことになる……。私は実際に近代化をした町がその後どうなったかを調べました。そして、自分の住む地域がどれほど大変な事態に直面しているのかを理解したのです。

これまで町のことに関心を持ってこなかった自分に、今更何が言えるのか？　近代化に向けて必死になっている人たちが、自分の言葉に耳を傾けてくれるのか？　私は悩みました。しかし、最後には「このことを伝えなければ一生後悔する」と近代化に反対の声を上げることを決意したのです。

しかし、私の言葉は全く受け入れられませんでした。それどころか、近代化反対の署名活動を始めた私は、町の人たちからの猛反発に遭ってしまいました。それまで町のために汗をかくこともなかった私が、町を活性化しようと頑張ってきた人たちに、いきなり「あなたたちは間違っている」と言ったところで、耳を貸してもらえないのは当然です。署名活動は中止に追い込まれました。

## 捨てようとした日常に他にない価値があった

最初の挑戦は失敗に終わりましたが、気付きもありました。それは、「近代化反対」を唱えるだけではダメで、町の活性化につながる別の手段を提案する必要があるということです。もしもそれが、捨て去ろうとしている古い町の価値を生かした案であれば、人々の意識を変えられるのではないか？　そう考えた私は、村上の良いところを探そうと町中を歩きました。でも、どこにでもあるくたびれた町に、誇れるものなど見付かりません。

ところが、ある時私は、私の店を訪れるお客様たちが、吹き抜けの天

きっかわ・しんじ
◎1964年生まれ。新潟県立村上高校卒業。早稲田大商学部卒業。東京での商社勤務を経て、村上の伝統的な鮭食文化を礎とした鮭製品製造加工販売を行う家業の「𡚬っ川」に勤務。村上の町おこしにおいて中心的役割を担い、手掛けた活動は内閣総理大臣賞など数々の賞を受ける。国土交通省より「観光カリスマ百選」に選定されている。

**城下町・村上の町おこし**

### 町の財産を生かして観光客を集め 市民参加の活動で町の再生を更に進める

城下町・村上に近代化計画が持ち上がったことをきっかけに、吉川さんが伝統的な町屋を生かした町づくりに取り組む。昔ながらのイロリや梁、吹き抜けなどのある町屋内部の魅力を、観光客が体感できるイベントを次々に発案。「町屋の人形さま巡り」（3月上旬から1か月）、「町屋の屏風まつり」（9月中旬から1か月）などで町は賑わいを取り戻した。昔ながらの黒塀のある景観を復活させるため、市民から黒塀1枚1,000円を募り、市民自身が制作を行う「黒塀プロジェクト」も行っている。

村上のまちづくり　http://www.k-shinji.info/

井、イロリや仏壇、神棚のある古い町人町の町屋の内部を見て、「江戸時代にタイムスリップしたようだ」と感動していることに気が付きました。村上の住民にとっては日常生活の空間であり、ただの古い家である町屋を、外部の人の目を借りて見ることで、それが価値ある宝だということが分かったのです。

私は、旧町人町の商店を回り、観光客に町屋内部を公開してくれるようお願いしました。そして、賛同してくれた22店の場所を記した手書きの町歩きマップを作成し、近隣の市町村に10万部配布したのです。

マップを手に町歩きする人が少しずつ増えていくのを見て、もっと強い光を町屋に当てようと決意した私は、妻と全国の町おこしを訪ね、いろいろな企画のアイデアや進め方を学びました。そしてそれを土台に、家々に伝わる江戸や明治の人形、屏風を町屋の生活空間の中に飾る「町屋の人形さま巡り」、「町屋の屏風まつり」を企画しました。予算もノウハウもありませんでしたが、「これが成功すれば町の人たちが町屋の価値を認めてくれるし、村上の明日が拓ける」と信じ、絶対に成功させようと無我夢中で取り組みました。

結果的に2つのイベントは全国から大勢の観光客を集めることに成功しました。この他にも町屋を舞台にした手作りのイベントを次々に実施し、村上の町おこしは全国の注目を集めるようになるのです。

閑散としていた町に多くの観光客が集まるようになったことは素晴らしいことです。しかし、それ以上にうれしかったのは、町の人々が次第に自分たちの暮らし、地域を誇りに感じるようになってきたことです。「うちは町屋ではなくボロ家」と笑っていた町のお年寄りが、町屋を見るために遠くからやって来た観光客に、町屋と村上の魅力について一生懸命説明している様子を見た時には、私は心から感動しました。

## 人のため、地域のためなら強くなれる

村上の町おこしはわずか十数年の間に大きな成果を収め、今では賛同者も増え、組織も出来ました。でも、私の活動は町の人たちからずっと否定的な目で見られていました。地域の人たちは変化を恐れ、自分と違ったことをしようとする人を受け入れるのに時間が掛かります。活動を始めて10年くらいは、私は本当に孤独でした。私自身は、さまざまな催しを成功させたことよりも、孤独に耐えたことを評価したいと思っているほどです。私が孤独に耐えることが出来たのは、全国の町おこしの現場から勇気をもらったからです。私よりも大変な中で頑張っている人たちのことを思い出すと、もっと頑張れるという気持ちになりました。

そしてもう1つ、リーダーシップも斬新なアイデアもない私が、四面楚歌の中でもくじけずに意志を貫き通せたのは、自分の欲得ではなく、皆のためだと信じていたからです。

私が町屋の重要性に気付いたばかりのころ、市長や観光関係者が集まる集会がありました。会場からの意見を求められた時、私は初めて町屋の重要性を話しました。マイクを手に100人の前で話すのは、当時の私にとって極めて勇気のいることでした。緊張で震える左手を右手で支えながら、町屋の重要性を訴えました。格好悪くても構わない。今ここで、地域のために、町屋の重要性を

### 村上の町おこし

「町屋の人形さま巡り」「町屋の屏風まつり」では、江戸や明治のたたずまいを残す町屋の内部を見学できる

城下町らしい景観を取り戻すため、「黒塀1枚1,000円」の寄付を募り、市民がボランティアで黒塀を作るプロジェクトも進む

訴えなければいけないという気持ちが、私に自分の壁を乗り越えさせたのでしょう。自分のためには強くなれなくても、人のためには強くなれる……これこそが人間の強さの本質だと思います。

私は、全国それぞれの地域が、日本、そして世界に発信できる素晴らしい価値を持っていると信じています。地域の文化は、そこに生まれ、育った者にとっての大切な根っこです。この根っこがしっかりとしていれば、どこにいても自分を恥じることはありません。自分を誇れる人は堂々とした態度で、世界中の人と深く接することが出来るはずです。

福岡県福津市 津屋崎に生きる

# 対話を通して新たな価値を創る「グローバルマインド」こそこれからの地域に必要

NPO法人地域交流センター津屋崎ブランチ代表 山口 覚

## 地域に根を下ろして本当の町づくりを目指す

大学を卒業後、東京の大手総合建設会社に入社した当時、建設業界は長野オリンピックに向けた建設ラッシュに沸いていました。私も競技場の建設に携わるなど、楽しく仕事をしていましたが、次第に箱物を中心に据えた「町づくり」に違和感を感じるようになりました。

地域が元気になるために本当に必要なものは何か、私は考えました。道路を拡幅したり、新しい建物をつくったりすることだけで、本当にその地域は活性化するのか。地域に必要なのはハードの充実以上に、1人でも多くの若者が都会から戻って来る仕組みではないかと私は考えるようになり、そのためのソフトの整備に取り組もうと、全国で地域活性化事業を展開するNPO法人に転職したのです。

地域の人と一緒に働く日々は充実していました。でも、プロジェクトが終われば、その地域の変化を見届けることなく、別の地域へ移らなければなりません。ハードからソフトへと仕事の中身は変わっても、自分の地域へのかかわり方は何も変わっていないことに気が付きました。

地域の中で積み重ねられてきた時間を受け継ぎながら、町づくりを行い、その成果を更に地域の中でじっくりと育てていくべきではないか。やはり、いつかは自分の地元である九州、福岡の地に根を下ろしたい……そう思い始めた矢先、NPO法人が福岡県福津市から、玄界灘に面した津屋崎の町おこしに関する業務を受託しました。プランの立案を自ら行い、その中には「私自身が津屋崎に移住し、町づくりに参加する」という一文も盛り込んでいました。このプランが採用されたため、私は

やまぐち・さとる
◎1969年生まれ。福岡県立八幡高校卒業。九州芸術工科大（現・九州大）芸術工学部卒業。東京の大手総合建設会社で都市デザイナーとして町づくりに携わる中で、地域の活性化に関心を深める。2002年NPO法人地域交流センター理事となり、2009年津屋崎ブランチを設立。津屋崎に移住し、新しい町づくりの形を提唱している。

２００９年にＮＰＯ法人の支所として「津屋崎ブランチ」を設立し、津屋崎に移り住んだのです。

## 都会よりも地域にこそアイデアが必要

都会から抜け出し、美しい自然と温かい人情に包まれて暮らしたいと願う人は少なくありません。しかし、地域経済は停滞し、人口は減少しています。空き家や空き地が多くなり、地域ならではの景観やコミュニティーの維持も難しくなっています。では、地域は衰える一方なのか？

私はそうは思いません。都会の理屈で考えることをやめることで、地域再生のあり方が見えてきます。

例えば、過疎化が進む地域では、何十万円もの月収を得られる仕事は確かに少なくなっています。しかし、月に5万円を得られる仕事が4つあれば生活は出来ます。「複業」という考え方です。私が所属するもう1つのＮＰＯ法人では、福津市と共に町づくりの一環として、「福津プチ起業塾」を毎年開催していますが、既に10人以上の小さな起業家が生まれています。さらに今年は、同じ福岡県の大刀洗（たちあらい）町が「まちの小さな起業塾」を開催しました。工場を誘致できなくても、１００種の仕事が営まれるようになれば、田舎の良さを保ったままで経済は活性化し、地域の生活は賑わいます。「経済」と「地域の良さを生かした生活」の両立に向けての挑戦が、小さな自治体で始まっているのです。

「古民家再生」も、地域の活性化につながる重要な取り組みの1つです。空き家を壊すことなく移住者を迎えることが出来れば、昔ながらの景観を保ちながら町に賑わいを取り戻せるからです。しかし、現実には大がかりな改築が必要で、また、代々伝わる家を人手に渡したくないという人も多く、古民家活用は全国でもなかなか進んでいません。そこで私が考えたのは、家主に負担を掛けずに家を改装し、一定期間借りた後に返却する事業モデルです。利用者に先払いしてもらった数年分の家賃を原資に改築を行い、家主とは期間限定の借家契約を結ぶというものです。津屋崎でもこの春、30年間も空き家だった古民家が、12人の出資者の協力で6年間限定の宿泊施設として生まれ変わったばかりです。

過疎化や高齢化、空洞化など、複雑な問題を抱える地域に生きる人にこそ、ゼロから1を生み出すような発明の力が必要だと私は思います。もちろん、ゼロから生み出すことだけではなく、既存のものを組み合わせて、新しい価値を生み出すのも発明です。そしてそれが出来るのは、広く世界を見て、現代社会の仕組みを深く理解した上で、それでも従来の価値観にとらわれずに自分の見方、考え方が持てる人だと思います。だから私は、都会の楽しさ、便利さを理解して、なおも自分の感性で地域を選べる人に魅力を感じます。私自身、東京での社会人経験があったからこそ、「日本の地域はこのままではいけない」と思うようになったのですから。

## 仲間がいるから私は地域で頑張れる

町おこし、町づくりを仕事とする私ですが、「地域ブランド」という言葉は好きではありません。この言葉の裏に、「よそを蹴落として自分たちが勝とう」という競争の論理を感じるからです。地域も人も、他と比べながら自身の価値を追求している限り、いつも焦りを感じることになり、本当に幸せにはなれません。他者と比較し、競争する考え方とは一線を画す、別の行動哲学を地域は

**津屋崎ブランチの活動**

### 移住希望者の支援など町づくりのための活動を展開

福岡市と北九州市の中間に位置する福津市は、2005年に福間（ふくま）町と津屋崎町が合併して誕生した。旧福間町は、ＪＲ福間駅を中心としたベッドタウンであるのに対し、旧津屋崎町は、ウミガメが産卵する砂浜やカブトガニが生息する干潟を持つ自然豊かな場所である。旧津屋崎町に移住者を受け入れるための仕組みづくりや、町づくりに関するワークショップ・交流会などを行うことを目的に、ＮＰＯ法人地域交流センター津屋崎ブランチが設立された。現在、山口さんのほか、全国から公募された３人のスタッフが働いている。

津屋崎ブランチ　http://1000gen.com/

率先して持つべきだと思います。

津屋崎ブランチの町づくりには、3つの指標があります。それは「100年前でも通じること、100年後でも通じること、他の国でも通じること」です。効率性や流行ではなく、不易を追求することが地域における行動哲学であり、不易であるからこそ他の地域の共感も得られるはずです。そうして、それぞれの地域が競争するのではなく、仲間になって日本全体を底上げしていきたい。だから津屋崎の成功手法は、出来る限り多くの地域に取り入れてもらいたいのです。

また私は、地域に住む者として仲間づくりを強く意識しています。かつて私は、「紛争や飢餓で命を失う人が世界にたくさんいるのに、町づくりに取り組むのは偽善ではないか」と悩んだ時期があります。でもこの悩みは、お互いの努力を認め合える仲間がいれば解決することに気付きました。国際機関で働く友人に「僕の出来ないことをしてくれてありがとう」と感謝し、そして友人も私のしていることを認めてくれる。農業、福祉など、さまざまな分野で頑張る人たちと仲間になることで、自分は自分の目の前の仕事を頑張ろうと思えるようになったのです。

仕事の内容や働く場所が違っても、お互いを認め、仲間になれる感性を持つ人……私はそれがグローバル人材だと考えます。地域や世界に広く目を向けながら、自分の役割を果たし、社会に貢献できる人です。

全国には、町づくりに取り組む仲間がたくさんいます。彼らは、未知の価値観と向き合った時にも、それを否定せずに、なぜそうなのかを考えようとします。「どちらが正しいか、討論して白黒をつけよう」と価値観をぶつけ合うだけでは、敵をつくったとしても新しいアイデアは得られません。しかし、お互いの価値観を認めた上で、なぜ違うのかを対話を通して探究することで、新しいアイデアが生まれます。地域が抱える高齢化や空洞化、さらに原発の是非のような問題は、対話の中で解決策を考えるしかないと思います。そして、そうした対話の姿勢を育むことが、これからの教育の役割ではないでしょうか。

グローバル人材は、視野を広く持っているのと同時に、自分が小さな人間であることを知っている人です。学校であれば、生徒が自分の価値観とは違う生き方を語る時に、頭ごなしに否定するのではなく、「なぜそうした考えに至ったのか」「自分の知らない世界を知っているのではないか」と生徒との対話の中で新たな価値観に迫っていく教師の姿ではないでしょうか。

自分の価値観を提示しながら、多様な価値観を認める教師の姿勢から、生徒はきっとグローバルマインドを感じ取るはずです。そうした大人との対話を通して若者たちは、今の世の中で要領よく生きていく力ではなく、今の世の中を変えていく力、地域を元気にしていく生き方を志向するようになるのだと信じています。

## 津屋崎の町づくり

### 「福津プチ起業塾」

地域の小さな町ならではの温かな人間関係の中で、仕事と暮らしを無理なく両立することを目指し、複数の仕事で生活していく複業モデル、「プチ起業」を提唱。福津市や大刀洗町、福岡大学などで市民講座を開催している。津屋崎の古民家を利用して営業する「Cafe and Gallery 古小路（こしょうじ）」もこの塾から誕生。紅茶店、手作りパン店、おにぎり店、カフェ、食堂など、日替わりで店長と屋号が替わる。このほか、さまざまな部活動のあるカフェやおしゃれな看板店などのプチビジネスが誕生している。

### 「古民家再生」

津屋崎漁港一帯の「津屋崎千軒（せんげん）」と呼ばれる集落には、現在、50軒を超える空き家がある。古い家屋の体裁を守りながら移住者を受け入れることで、昔ながらの景観と地域のつながりを維持できる。そこで津屋崎ブランチでは、移住希望者と家主をマッチングさせた上で、改修を進めるプロジェクトを実施している。